
甘味学園学生寮

一宮 秋臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘味学園学生寮

【Nコード】

N0621Z

【作者名】

一宮 秋臣

【あらすじ】

甘味戦争の終戦から五十年。国連により甘味規制法が制定され菓子は世界中で超高級品となった。

菓子職人の候補生が集う、選ばれたエリートのみが入学出来る甘味学園。そこに菓食う変人奇人どものどたばた日常コメディー。

冒頭はシリアスっぽいですが、完全ギャグです。物語に出てく登場人物、ストーリーについては、作者実体験に基づく、ほぼノンフィクションにてお送りしています。

完全見切り発車ですが、お付き合い戴ける方は遠慮なくガンガン乗り込んで下さい。無賃乗車どんとこい！

甘1（前書き）

雨で暇だったんでアホ話始めました。（冷し中華始めました風に）
登場人物は名前こそ違いますが、実在の人物がモデルです。もしかしたら、貴方の傍にいるかもしれません。

甘 1

甘いクレープ。芳醇なカカオの薫るチョコレート。さっぱりと酸味あるチーズケーキにふんわりとしたシュークリーム。

口どけ滑らかな水羊羹。とろけるようなみたらし団子。ひんやりと冷たいアイスクリーム。

幼い頃から、お菓子が大好きだった。

だから、思い返せば。

僕がこの道を選んだのも、半ば必然だったのだろう。

甘いものは正義だ。

「つちーな……」

滴る汗を拭いながら、結城はうんざりとぼやいた。

真夏の太陽は、その威勢を誇るかのように、かんかんとした日差しで容赦なく地上を照らしている。八月の下旬に差し掛かってもまだ衰えをみせない猛暑は、今週に入っても更に、今年最高気温を更新したばかりだ。

「くっそ、高地に来れば、少しは都内よりマシだと思ったのに……」

周囲を濃厚な緑に囲まれた景色は、都会ではなかなかお目にかかれないものだ。特に、地方に実家がない結城にとっては、鮮やかな木々の緑がよりいっそう新鮮に見える。

とはいえ、イコールでそれが暑さを軽減させてくれるかというと、そうでもなかった。確か今年は節電のため都内でもグリーンカーテンなるものが流行っていると聞いているが、これだけの量の植物を持ってしても、照りつける太陽には敵わないらしい。

「ていうか、別にカーテンになってるわけじゃないから、そこまで遮熱効果を期待しても無駄なんだよな」

植物には葉の蒸散による冷却効果があるらしいが、明らかに加熱にその能力が追いついていない。

「つーか、水気が多くて逆に蒸す……」

顎を伝う汗をシャツで拭き、ぱたぱたと扇ぐ。

それでもなんとか日差しから逃れようと、手でひさしを作り陽光を遮ってみるが。眩しさが軽減されたとはいえ、体感温度は欠片も変わらなかった。

「最近じゃもう、絶対日本の気候は温帯湿潤気候じゃなくて、亜熱帯に変わりつつあるよなあ」

真夏に時々都内で発生するゲリラ豪雨も、そう考えると寧ろスミーズに納得がいく。ようするにあればスコールだ。まさしく亜熱帯とかで発生している。

（ヤバい、死ぬ……）

阿呆な事を考えていると、冗談抜きに眩暈がしてきた。脱水症状を起こしては敵わない。慌ててペットボトルのお茶を煽る。疾うに温くなってはいたが、それでも水分が体中に染み渡ると、幾分体がマシになった気がした。

（危ない危ない。こんなところで倒れたら、マジで干からびるからな。せめてバス停までは行かないと）

氣力を奮い立たせて、歩みを開始する、駅からバス停までの距離は、徒歩で十分と書いてあった。十分ほどまでに十分は過ぎたが。

「ここで道間違っていましたー、とかだったらさすがに泣くな」

それでもめげずにえっちらおっちら進む事しばし。否、かなり。

「……どこが十分だよ」

駅から歩くこと約三十分。ようやく見つけたバス停を前に、結城は力なく地面にへたり込んだ。

とはいえ、折角目的地（に向かうための場所）についたというの

に、地べたにへたれている理由はない。第一、アスファルトの上は熱い。極めて理性的な思考の元に立ちあがり、バス停のベンチに腰掛ける。結城は結構リ Aristot だった。

バス停はただ野天にベンチがおいてあるだけのタイプではなく、風雨を凌ぐためか屋根と壁のある簡単な小屋のようなものだった。雨はともかく現状では風の恩恵は受けておきたいのだが、とりあえず日差しを防げる事実には、結城は感謝した。

幸運にも隣にあった自販機で新しく飲み物を買って、一気飲みする。喉を過ぎる清涼な冷たさに生き返る。

「ふう……行くまでに一苦労だな、こりゃ」

一休みしてから、バスの行き先と時刻表を確認する。幸いな事に、バス停は間違ってたなかった。

（ていうか、これで単純に迷子だったてんななら、いっそ笑えるけどな）

胸中で自虐気味に独りごちる。先のバスは逃してしまったようだが、どうやら二十分に一本は走っているらしい。よかった。二時間に一本だったらどうしようかと思った。

いくら都会っ子とはいえ、結城でも田舎の交通事情ぐらいは知っている。都内と違い、そう頻々に、バスや電車が走っていない事は、ここに来るまでの道中でした。まあ、実際のところ、ここまで便が悪かったのは、単に時期的なものもあるのだが。

これ以上の体力消費を避けるため、大人しくベンチに腰掛け本を読みながらバスを待つ。不意に強く風が吹き、結城は顔をあげた。

「お、来たか」

道の先に目を向けても、バスの影はおろかエンジン音さえ聞こえてこない。しかしこの時結城は、既に近づいてくる車の存在をはっきりと認識していた。

やがて。

結城が視線を向けた先から、バスがやってくる。乗客が一人もいないそのバスは、結城の待つバス停の前で止まった。

「よお、学生さん。乗るかい？」

乗車扉の奥で、運転手が親しげに声をかけてくる。都内なら間違ってもない光景に、結城もまた笑顔で答えた。

「乗ります」

自分の財産全てを詰め込んだトランクを重そうによつこらせと持ち上げようとすると、そんなこちらを見かねたのか、運転手の男性がわざわざ降りて手伝ってくれた。地方のバス会社はそんな事までしてくれるのか、と内心でその接客サービスに驚きはしたものの、助力がありがたい事は変わらない。頭を下げ、感謝を告げて荷物と一緒にバスに乗り込む。

「——で、お客さん。どちらまで？」

まるでタクシーのように行き先を訪ねてくる運転手の彼に。

「終点までお願いします」

結城は行き先の書かれた案内版を見つめながら答えた。

『甘味学園学生寮行き』

たった一人の乗客を乗せたバスは、終点に向けてのんびりと走り出した。

嘉永六年——一八五三年のペリー来訪を機に、日本が開国を迫られて以来、それまでの鎖国のツケを洗い流すかのように、日本という国のありようは目まぐるしく変わっていった。

幕末の混乱期を乗り越え、新たに即位した明治天皇が東京に行幸し、江戸と呼ばれたかつての日本の本を、東京という名に改めた時から、物事は万事、一気に加速して動き出した。

まず、明治二年に電報が開始した。江戸時代には手紙を届けるには主に飛脚か馬が主であったにも関わらず——と、いうより他に手段がなかった——時が明治になると同時、あっという間にその通信手段は姿を変えた。恐るべき速さだった。

翌、明治三年には人力車が開業。時同じくして、牛鍋屋なるものが現れ、それまであまり縁のなかった獣の肉を庶民が口にするようになる。

同時に、散発令、太陽暦の起用、ガス灯の導入や廃藩置県、四民平等制など、諸外国を見本とし、日本は貪欲といってもいい速度で、かつての江戸の名残を脱ぎ捨てて、世界の中に溶け込んでいくと必死であった。

本来であれば、もっと時間をかけてゆるやかに行われるべきであった変革は、その怒濤のような勢いと比例して、世の中に大なり小なりの混乱を少なからず生みだし、結果としてはその混乱が、後の戦争で日本を弱体化させる原因の一つとなるのは、また別の話である。

閑話休題。

江戸から明治への転換期には、時代に取り残されたもの、取り残されるもの、己が身一つで財を成し上げたものなど、多くの人々の人生を動かしたが、かといって、全ての変革が江戸の世の人々に倦厭されたわけではない。中には無論、大いに歓迎されるような変化

もあつた。

新しい菓子の登場はその一つだ。

もともと、江戸時代にも多少は存在してはいたのだが、当時は阿蘭陀としか国交がなかった日本にとって、海外から輸入される品は非常に高価であり、団子や饅頭と違い、到底気楽に庶民の口に入る品ではなかった。

それが、明治に入るに従って、かつて南蛮菓子と呼ばれていた海外の菓子達は、西洋菓子とその名を変え、それまで口にする機会がなかった人々をたちまちのうちに魅了した。もとより、時代が移れど新しいものの好きである江戸っ子の気質までは変わらない。また、帝都には逗留中の外人が住まう、居留地があつた事も、人気に拍車をかけた理由の一つだろう。

世の中には、牛鍋ブームを遙かに凌駕する西洋菓子ブームが巻き起こり、一攫千金を目指して、この新たな分野で成功を収めようとする者も増えていた。そうして、熱狂は留まる事を知らずに、日本全国へと広がり、未来の菓子職人を目指す多くの優秀な人物達が、その作り方を学ぼうと海外へ飛び出していった。鎖国時代には考えられない出来事である。

世界各国の中でも、日本人の勤勉さと器用さは非常に有名である。日本を飛び出し、本場西洋の地で菓子の修行に励んだ留学生達は、学んだ技術を無事祖国に持ち帰り、その知識を広く世間に伝えた。また、自らも海外での経験を元に研鑽を重ね、オリジナルの菓子を多く作り出した。それらは日本国内に留まらず世界各国でも爆発的な人気を呼び、遂には菓子の逆輸入が行われるようになりやがてこれらは、日本の貿易黒字を支える重要な要となる。

日本の菓子が火付け役となり、世界中で甘味ブームが広がる一方でまた、深刻な問題も浮上してきていた。需要過多による菓子の原材料不足である。

特に、製菓材料のほとんどをヨーロッパからの輸入に頼っていた日本にとって、この事態は痛かった。各国が競って輸入規制を設

ける中、製菓原料の供給を求め、自給率の低い国々が結集して自由貿易を求める動きが始まる。

これが後の世に言う『甘味戦争』の始まりであつた。

当時、製菓による貿易力を国力としていた日本には軍事力がなく、結果として日本を始めとする連合軍は敗戦側となる。またそれを期に、国際法で甘味規正法が制定。原材料は勿論、完成した菓子の流通についても、国内外を問わず多額の税がかかるようになってしまった。

特に、勝てば官軍の言葉にあるとおり、この時結ばれた規正法の中での税率は、敗戦側に属する日本にとって、非常に不利なものであつた。

そして終戦後——甘味規正法の制定から五十年が経過した現代。開氏四十二年。

なまじ規制が成された事により、各国での甘味需要はますます高まり、優秀な菓子職人の存在は非常に重宝され、各国は競って菓子職人の育成に取り込んでいた。

同時に、かつての敗戦国である日本は、その優れた製菓技術を売り出す事で再び強国の座に返り咲き、また海外からも留学生を受け入れる事で、各国から原材料等の優遇措置を受けられるようになっていた。

関東は東京、八王子にある『第三国立甘味学園』

毎年、多くの優秀な菓子職人を輩出するそこは、全国でたった十校しかない、菓子職人の育成のみを専門とする国営の教育機関である。

日本でも限られた人間のみが入学を許され、さらに厳選された海外からの留学生をも受け入れている、極めて特殊な閉鎖空間。

日本で唯一、何の制限もなく様々な菓子が存分に味わえる
場所——甘味に焦がれるものにとっては聖地ともいうべき、地上の
楽園である。

甘2（後書き）

ちよつとそれっぽく書いた嘘歴史。どこまでが史実でしょう？

「——学生さん。ホラ、ついたよ。そろそろ起きなつて」

聞きなれない声と共に、軽く肩を揺すられ。

「……………」

結城は夢うつつのまま目を開いた。少々キツめの車内の空調とバスの振動に誘われ、いつの間にやら寝入ってしまったらしい。たった二十分ほどの道のりなのに、驚くほど熟睡していたようだ。長時間、直射日光にさらされて、体力が奪われていたというものの原因の一つだろう。ふと腕時計に目を向ければ、到着予定時刻から十分近く立っている。都内ならともかく、こんな田舎でオマケにシーズンオフの山道で交通渋滞はありえない。となると、終点到着後、いつまでも降車しない乗客を気遣い、待っていてくれたのだろうか。

（——うおっ）

「……………つすいません！」

と、ここに到つてようやく事態を把握し、慌てて立ち上がる。

急いで荷物を降ろそうとすると、運転手はからからと豪快に笑った。

「いーって、いーって、気にすんな。どーせこのバスは、今日はもうこのあと、回送になっちゃうんだからよ。どれ、貸してみろ」

「い、いや、大丈夫ですから！このくらい自分でやりますよ」

当然のような顔で結城のトランクを降ろそうとする彼の手から、荷物を奪い返そうとするが。反対にあつさりと笑顔で押しのけられる。

「いーから遠慮しなさんなつて。見たとこ、学生さんも大分お疲れみたいだし、今のあんたにはこの荷物はちいと重すぎるだろう」

そう言われてしまえば、言葉はない。都会ではあまり馴染みの無い、赤の他人との交流に、なんとなくむず痒いものを感じながら、結城は「お願いします」と頭を下げた。事実、荷物の重さについては、身を持って実感しているところだった。

結局トランクを運ぶのは、大の大人二人がかりでもそれなりに苦勞したが。運轉手の手伝いのお陰もあって、なんとか降ろすことができた。

「それにしても重い荷物だねえ」

「全部で四十キロありますから」

その答えはさすがに予想外だったらしい。彼は驚いたように目を見張り「よくそんなに入ったなあ」と感心したように呟いた。

「何が必要になるか分かりませんからね。とりあえず、思いつくものを片っ端から持ってきました」

トランクの容量限界に目一杯挑んだ成果である。一度中身を取り出したら多分、否、確実にもう元には戻せない。

「大げさだなあ。言っても、同じ日本国内じゃないか。足りない物が出てきたら、後から買い足せばいいだけだろうに」

「学園内は治外法権だつて聞いてますけど……備えあれば憂いなしっていうじゃないですか。それに生憎、僕の身の回りには、この業界に詳しい人間がいまませんでしたから」

素直に事実を告げると、彼はおや、という顔をした。

「ははあ、なるほど。君は一回生か」

「ええ。新学期が始まる前に、少しこつちでの生活に慣れておこうと思つて」

「そりゃあ感心だ。ここは都会と比べると随分空気が違うだろう」「一応、ここも都内の筈ですが……」

がらがらとキヤスター付きのトランクを引きずりながら、苦笑を浮かべる。上下移動ならばともかく、平行移動ならこの重量でも運ぶのにそれほど苦ではない。

なのでもう手伝いは大丈夫だと、やんわり断つたつもりだったのだが、何故か彼も並んで歩き出した。聞けば、ちょうど交代の時間らしい。

「事務所と受付は同じ場所だからな。ついでだから一緒に案内してやるよ」

「さいですか」

そうまで言ってくれるのならば、是非もない。結城は黙って従う事にした。隣を歩く彼は、小脇に運転手用の帽子を挟み込んだまま、いかにも気安げな口調で、

「なあに、東京つつつてもこの辺なんて、もうほとんど田舎みたいなもんさ。京都だって碁盤目状の土地を出れば、あとは畑だろ。あれと同じだよ」

「はあ……」

そのたとえの意味はよく分からなかったが、とりあえず頷いておく。

実をいうと、結城の実家がある練馬区も、二十三区に入っているがそれほど都会ではない。さすがにここほどではないが随分と緑も多く、新宿などの高層ビル群の並ぶ都心と比べると、かなりのんびりした土地である。頑張ればトトロに会えそうな。

「学園は大抵、郊外にありますからね。さすがに、この規模の建物と都会のと真ん中に持つてくるのは無理でしょう」

全国にある十校の甘味学園は、全て各都道府県の県庁所在地にあるが、実際に校舎が建てられているのは、その都心部からかなり離れた場所である。使用する菓子の原材料は高価なため、可能な限りの自給自足で賄うには、広大な菜園や牧場が必須となるからだ。

加えて、在校生徒への気遣いという点もあるが。

「僕の実家もそこそこ緑が多い場所とこなんですけどね。でも確かに、こっちの方が遥かに楽です。全然気持ち悪くもならないし」

「ああ、あんたも『そう』なのか。そりゃ都内で過ごすには大変だったろう」

同情の眼差しを向けてくる運転手に、結城はいいえ、と首を振った。

「ま、あんたみたいな都会っ子には馴染みがない場所かもしれんだけどな。徐々に慣れてく事だ。——と、着いたよ。ここだ」

日本語、英語、中国語、韓国語、四力国の言葉で『受付』と書

かれた建物の前で立ち止まると、運転手の彼は手を振った。

「じゃあな、学生さん。頑張れよ」

「はい」

親切な彼に別れを告げて、改めて入り口に向き直る。

「頑張れよ……か。確かに僕みたいなのは、必死で頑張んなきゃ、取り残されちゃうだろうしな」

よしと、自分に気合を入れる。

多少の不安はあったが、ここから先は自分一人だ。

結城はがらごろ音を立てるどでかいトラックを共に、最初の一步を踏み出した。

甘3（後書き）

今は冬なのになんで季節設定が夏になってるかつつと、作者の旅立ちが夏だったからです。なるべく現実に忠実に書いてます。

甘4

最初にそれを知ったのは、実のところ単なる偶然だった。

「甘味学園第三十四期生募集のお知らせ……？」

都内にある、比較的小規模な私立大学。

結城がいるのは、その構内の国際センターがある掲示板の前だった。今度の夏休みを利用して、米国へと短期語学留学に行く予定の友人を、ソファに座って待っているところである。

最近（といってももう一年以上前だが）新しく立て替えられたばかりの新校舎は、いろいろと綺麗で便利だが、未だに建築材の臭いが強く残っているようで、結城はあまり好きでない。友人にいったら、そんなものが分かるのはお前ぐらいだといわれてしまったが、

「へえ……うちの大学でもこんな張り出しあったんだ」

少し気になったので、目新しさも手伝い、立ち上がって見てみる。結城の視力では、壁際のソファから掲示板に張られたポスターの、細かい字を見るのは少しキツイ。

菓子職人への道は細く険しい。その職種の性質上、たんに好きや憧れだけでなれるものではなく、ある程度の素質や才能が必要となってくるのだから、当然だろう。まさに『選ばれた者』の職業なのだが、一方で、その登竜門ともいうべき甘味学園への入学に関しては、実は広く門戸が開かれている。

無論、入学自体は厳しい試験に合格しなければ出来ないが、その入試条件に関しては意外なほど規制が緩い。年齢制限や特殊資格の必要もない。実際の試験でのふるい落としがそれだけ多いということもあるが、それ以上に需要に対する供給の乏しさが原因としては一番大きい。優秀な菓子職人の存在は、どの国でも喉から手が出るほど求められている。故に業界としても、才ある人材の確保には貪欲になるのだ。

「ま、僕には縁のない世界だよな」

募集要項や概要など。つらつらと書かれた項目をなんとなくはなしに読んでいると、

「ユウ、お待たせ——って、あれ？何か気になる知らせでもあった？講義、休校とか？」

「いや、別に。お前、もう用事は済んだのか？」

いつの間にか、背後に立っていた友人に尋ねる。相手は頷き、少しこちらを気にするそぶりをみせたが、

「そ？だったらいいけど。ゴメンゴメン、事務のおっさんの話が長くて、思ったより長びいちゃった。ツラの講義は混むからな！。さっさと移動しないと、席がヤバイかも」

「あ、やべ。そーだった」

丁度降りてきたエレベーターに、友人と一緒に駆け足で乗り込む。

この時までには、ただそれだけの話であった。

授業が終わって家に帰ったものの、頭の中にはなんとなく昼間見た張り紙が残っていた。

「菓子職人、かあ——」

ふいに思い立って、自前のパソコンを起動させる。真っ白いパソコンはバイト代を溜めて自分で買ったお気に入りだ。

たちあがると同時に、さっそく検索画面を開いて、あれこれ調べてみる。入学条件、その後の進路、授業料など、e x t , e x t

……

調べていくうちに、なんとなく面白そうだ、から、行ってみた、という思いに変わるまで、そんなに時間がかからなかった。元来、思い込みが激しいという事もあるが。

「大学出て何やりたいとか、特に希望もないしな——」

まだまだ先のこと——とも思うが、数年後の自分をイメージしても『何』をしているかなんてまるで想像できない。せいぜい、社会人やってるな、程度にしか。

（けど、僕の『体質』を考えると、つける職業つてのも限られてくるんだよねあ）

そして幸いにも、この場所は条件を満たしている。そう考えれば、これは絶好のチャンスかもしれない。

小さい頃から、結城は菓子が好きだった。そういう意味で、今の日本に生まれた事をとても幸運に思っている。甘味規正法が出来て以来、世の中の甘味は総じて高額となっており、無論、日本もその例外ではなく、店で買う手作り菓子などは未だに高級品の類だ。世界の中でもトップクラスの製菓技術を誇る、甘味大国の日本ならば、たとえ専門店で買う事が出来なくても、コンビニスイーツという庶民の味方がある。プロの職人の監修のもとに作り出されたらしい大量製品の菓子は、それでも一般人である自分が食べる分には十分に美味しい。

（でも考えてみりゃ、自分で作れるようになったら、好きなもん何でも食い放題じゃん）

例えば。大学の友人は、この夏から海外へ留学にいくという。結城はまだパスポートさえ持っていない。

周りが少しずつ自身の道を決めていく中、自分の中にも燦る何かがあった。何かないのか、何か。僕にも挑戦できること。

「——まあ、ありっちゃありかもな」

最終的に、その結論に辿りついた頃には、既に結城の脳内で、菓子職人となった自分の姿が燦然と描かれていた。

となれば、次の任務は親の説得である。

「なあ、父さん」

ん？と、ソファで新聞を読んでいた父が返事をしてくる。視線は、新聞からあがってなかったが。

結城自身、父親に目を向けていない。その眼差しは、テレビの中のとりのけーキ達に向けられていた。

「もしも、さ——」

どう説得したのか。言いよどむが結局名案は思いつかず、ストリートに告げる。

「もしも僕が、甘味学園に入りたいって言ったらどうする？」

「……お前、菓子職人になりたいのか？」

「い、いや、もしもだよ！もしも！今日、学校で募集のお知らせってポスター見つけてさ。なんとなく面白そうだなーって」

「ふーん」

さして興味なさそうな様子で相槌を打つ父親を、ハテどうやって説得したものか、と密かに脳内で作戦を練る。いや、そんなもん話題を切り出す前に練っておけ、と言いたいところだが、そこまで先に考えが回るほど結城は器用な性格ではない。生まれは鼠年だが、どちらかというと猪突猛進なタイプなのだ。

ぐるぐると高速で頭を回転させる中、父親の口から出たのは意外な一言だった。

「いいんじゃないか。別に」

「いや、まだ本決まりじゃないっていうか、ちょっとそんな事を思ってみたけなんだけど、僕なりに真面目に考えた結果なんで、少しは検討して欲しい——って、へ？」

きよとん、と驚いて目を見張る。ぱちぱちと瞬きすることに、友人曰く無駄に長いまつげが揺れる。

「い、いいの？」

「ああ。お前もそろそろいい年齢だし、将来の目標に向かって挑戦したいっていうのはいいんじゃないか」

相変わらず新聞を読み続けている父親の表情は、結城の位置からでは伺えない。そのためか、いまいち相手の思考が理解出来ず、半信半疑で聞き返す。

「——つつつても、うちからじゃ通えないし、一人暮らししなきゃだぜ！？学園の寮で」

「ああ。まあ、ずっと実家にいるよりいい経験だろう。集団生活っていうのも」

シュウも寮生活だったしな、と続ける。因みにシュウというのは一つ上の兄で、寮制の高校を受験したため、高校三年間はずっと寮生活だった。今では実家に出戻りだが。

「でも寮生活って事は、その分金がかかるんだけど……」

「ああ。まあ仕方ないだろう」

「それに！学園に通う事になったら、大学とは別に学費もかかるし！余計に！」

「そのくらいなんとでもなる。なんだ、お前反対されたいのか？」

「そういうわけじゃないけど……」

予想外にあっさりと賛成された事が信じられず、父が反撃の材料として使ってくるだろう、とシュミレートしていたネタを、逆に自分から言ってしまう。いや、そうじゃない。そうじゃないだろ自分。ここは寧ろ、諸手をあげて喜ぶ場面だ。とはいえ――

以前、一人暮らしがしくて地方の大学受験しようとした時は、都内で同レベルの大学に行きやいいって、反対したの誰だよ！？

金の無駄だ。そんな必要がどこにある。そういつて言いくるめられた結果、第一志望を諦めたのは、まだ記憶の隅にひっかかっている。戸惑いながらそう告げると、父親は「話が全然違うだろう」と、呆れたように歎息した。

「あの時はお前、たんに一人暮らしがしてみたいってだけだろうが。子供が本気で何かを目指したいと思ったなら、それを応援しない親がいるもんか。金の問題なんか気にするな。少なくとも、子供に自由な未来を選択させてやれるくらいの甲斐性はある」

惘然とした口調で、素っ気無く告げてくる。いらぬ事に気を回しすぎたらしいと気づいた結城は「ごめん」と素直に頭を下げた。

「――で、お前本気で行く気があるのか？」

図らずとも、お膳立ては整ってしまった。それも、思っていたより遥かにすんなりと。だとすれば。

選ぶ道など、一つだけだった。

そうして、大学生活真つ最中に、ひよんな事から将来への道を歩み始めた結城は、編入のための勉強と卒業単位を確保するため、怒涛の学生生活を送る事となる。親に予定外の学費を申し出てしまった身としては、留年など許される事ではなかった。

因みに、半ばノリと勢いで目指す事となつた学園への道のりの険しさに、後ほど激しく泣きをみるのはまた別の話である。

空調の効いた室内に入り、思わずほっと一息をつく。

あまり冷房の強い部屋に長時間いると血管の収縮により偏頭痛を起こしやすいのだが、それでも、この外気温と室内温度の急激な温度差と爽快さを体感できるのは、現代人の特権だろう。

ありがとう電気。ありがとう文明。

時期的なせいもあってか、室内にはほとんど人がいなかった。どうしようかと迷ってから、とりあえず一番近くのカウンターに行き声をかける。

「あの、すいません。入寮の手続きってこちらでよろしいんですか？」

「ええ、そうよ。——貴方、ユウキね。初めまして」

「え、あの？」

なんで名前を？

声に出さないこちらの動揺を見て取ったのか、受付の女性は、立ち上がりながら悪戯の種明かしをするようにくすりと笑うと、

「ごめんなさい。驚かせてしまつて。この時期の新生生はまだ数えるほどだから、名前を覚えているのよ。今日来る予定の生徒は、もう貴方だけだったから——」

驚いた？ と、茶目つ氣たつぷりにウィンクしながら差し出された手を握り返し、ほっと一息をつく。よかった。死神の目を持っているのかと思って、一瞬焦ってしまった。

「改めまして、ようこそ甘味学園へ。ここで事務手続きなんかをやつてから、新学期が始まつてからも、会う機会はあるかもね。歓迎するわ。新生生さん。よろしくね」

「あ、はい。結城です。こちらこそ」

にこやかに挨拶をしてくる彼女に、頭を下げる。そんな様子を見て、メイはくすくすと笑った。

「やっぱり日本人はこういうところが礼儀正しくていいわよねえ」
そういう彼女自身が日本人でないのは、一目でわかった。

髪と目の色こそ黒いが、彼女にコーカロイドの血が混じっているの是一目瞭然だった。海外留学生を受け入れ、外国人の講師を招くこともある関係上、甘味学園にはこうした外人スタッフが多い。そのわりに、メイの日本語はフラットだったが。素直に感想を告げると、

「それはそうよ。私、これでもれっきとした日本育ちだもの。親の仕事の都合で、中学からこっちの学校に通ってたの」

「へえ、そうなんですか。どうりで」

中身は日本製の彼女は、何枚かの用紙を取り出した。

「はい。これが入寮の契約書で、これが学校内地図。すごく広いから、最初は迷うかもしれないけど、スーパーやコンビニなんかも敷地内に入ってるし、学内から出なくても生活できるわよ」

「うっわ、本当に広いんですね……」

噂には聞いていたが、ケタ違いの広大さに改めて驚く。本当に日本か、ここは？

「そうね。大学内を循環バスが走ってるけど、移動用に自転車を持っておいたほうがいいわよ。不便だから」

「……ご忠告ありがとうございます」

新生活にこちらで取り揃えるものリストを更新する。どちらにせよ購入はする予定だったので、予算的には問題ない。

「あとは……そうね。伝えとくべきはそのくらいかしら。じゃ、これが貴方の部屋の鍵よ。五階だから、ちょっと大変だけど頑張てね。ルームメイトは韓国人だから。同級生だし、仲良くやりなさいよ」

……あれ？

さらりと告げられた注意事項の中に、何かとてつもなく聞き捨てがたい発言があった気がして、思わず沈黙する。

「……………」

「……………ルームメイト？」

「……………あら？」

自ら作り出した沈黙に耐えかねて、結局咲きに口を開いたのは結城の方だった。彼女が気づいたように、ああ、と頷く。

「そりゃ、日本人同士の方がよかつたんでしょうけど、残念ながらこれに関しては我が儘は通らないわ。部屋割りは学園側がランダムで決めさせて貰うから。外国人留学生には、日本人が必ずペアになる決まりなの——そう倦厭しないであげなさいよ。確かに慣れない寮生活は不安かもしれないけど、相手の方はそもそも外国暮らしになるのよ？ ハンデは比べ物にならないんだから——」

「いえ、そうではなくて……」

まくし立てる彼女の言葉を遮って、告げる。

「そもそも僕は、個室を申請している筈なんですが」

結城の言葉に。

相手の表情が、その動きごと停止した。二人の間に、凍りつくような沈黙が降りる。

「……………」

「……………」

甘味学園は全寮制だが、部屋のタイプは料金プランによっていくつが異なる。

まず、一番高いのが1LKの個室。二番目が同タイプの二人部屋。三番目がやや手狭な個室だが、こちらはユニットバス・タイプ。そして四番目が同タイプでの二人部屋だ。それぞれ、一・二番タイプが一号棟、三・四番タイプが二号棟という形で分かれており、二人部屋は個室より広いが、当然の事ながらトイレ・風呂はルームメイトとの共有になる（勿論、それとは別に大浴場などの完備があるが）ちなみに、結城が申請したのは一号棟の個室だ。間違いなく。

二人部屋の場合はルームメイトが選べない。日本人同士ならまだ楽だが、外人同士となると、まずコミュニケーションの部分で大変な不便が生じてしまう。そのために個室を申請した。ハイクラス

にしたのは、ユニットバスが許せないという、日本人らしい独自の拘りのためだ（因みに父親はこの我が儘をあつさり許した。一度了解を取れば実は子供にめちゃくちや甘い我が父である）

「……………」

「……………」

沈黙は長かった。

予想以上に長かった。

それでも根気よく待ち続けていると、やがて彼女が呆けたように口を開く。

「……………個室？」

「はい」

「本当に？」

「はい」

重ねて頷く。力強く。

別に結城はそれほど対人能力が低いわけではないが、それでも始めての一人暮らしで言語コミュニケーションの取れない相手と共同生活を送ってみたいと希望するほど、積極性に富んでいるわけではない。兄が結城につけたあだ名は「ネアカな引きこもり」である。

彼女はなにやら蒼白な顔で「ちよつと確認してみるわ」と席を外してしまった。ややあつて、更に顔色を悪くして戻ってくる。

「……………確かに、個室で申請がされているわね」

「でしょうね」

「でね。その……………非常に申し上げ難いんだけど、どうやらちよつとした手違いがあつたらしくて、ユウキは相部屋で手配されているの」

「みたいです」

薄々察していた——などととぼけるつもりもない。ここまでの状況で、その可能性に気づいていなかったただの馬鹿である。メイが、恐る恐るといった体で聞いてきた。

「ちなみにユウキ、英語の方は……………」

「義務教育を終えている程度です」

取り繕うような事はせず、きっぱりと答える。相手は一つ頷くと、ぐつと拳を握った。

「よしつ。それならコミュニケーションには問題ないわね！」

「問題ないわけねえだろ！？何言ってるんですかアンタ！」

動揺のあまり言葉遣いが素になった。対して彼女は、まるで拗ねるように口を尖らせる。

「何よ、仕方ないじゃない。二人部屋で処理しちゃったんだから。もう空きがないのよ」

「仕方ない、じゃ無いだろ！？諦めんのが早えよ！フリでもいいから努力しろ！」

「いいじゃない。せっかくのチャンスよ。タダで異文化コミュニケーションに親しむ事が出来るし、この機会に英語が上達するかもしれないわよ？」

「僕は菓子職人になるための勉強をしにこの学園に来たんであって、語学のために来たんじゃないっ！」

「もうっ、我が儘ばっか言ってるで、少しは目の前の現実を見なさいよ。世の中足掻いたって、どうしようもない事と、どうにもならなくてもいい事があるんだから」

「真面目に対処する気がそもそもねえ！その上さりげなく面倒ごとのカテゴリに突っ込みやがった！？つか、そっちのミスに勝手に僕を巻き込むな！責任者呼んで来い！」

「ちよつと、クレーマーでもあるまいし、大声あげないでくれる？大人げないじゃない。もしも私のちよつとしたミスが周りにばれて、首にでもなったらどうしてくれるのよ？この不況の最中に外国人雇ってくれる職場って探すの結構大変なんだからね」

「知るか——っ！」

渾身の力を込めて反論するが、受付嬢はやれやれと首を振って溜息をつくだけだった。その妙にアメリカンが仕草が、微妙に馬鹿にされているようで腹が立つ。

実際、特に反省したそぶりも見せずに彼女は口を開いた。

「けど真面目な話、本当に申し訳ないけど、現時点では個室の空き部屋がないの。もしどうしても相部屋が嫌だつていうなら、二人部屋を一人で使うつていう方法があるけど……その場合、料金は二人分払って貰わなきゃならないわ」

どう、と伺うような視線で尋ねてくる相手に苦々しく首を振る。バストイレ別の個室を親に許して貰っただけでも御の字なのに、これ以上の出費を願うわけにはいかない。

生活費を切り詰めれば二人部屋を借りるのも可能ではあるが、今後どんな出費があるかも分からない状況で、それは避けたい。

「だとするとやっぱり、相部屋に入つて貰うしかないわ。悪いけど……」

「……まあ、事情は分かりました」

困つたように説明してくる女性に、渋々頷く。現実として部屋に空きがないなら、たとえ結城がいくら駄々を捏ねてもしょうがない。

「けど、ルームメイトの方は真面目な話、なんとかありませんか？ 変な意味じゃなくて、本当に英語は苦手なんですよ。僕が新入生の先発組なら、まだ組み合わせ変更は可能でしょう」

こちらが妥協するふりをして、相手からの譲歩を引き出そうとしたが、その計画は呆気なく崩れた。

「さっきも言ったとおり、外国人留学生には日本人をつける決まりなの。勿論、他にも日本人はいるけど、その子達は学校からの団体で入学することになってるから。貴方みたいな無所属の個人で入ってる子つて、割りに珍しいのよ」

確かに、一般的に甘味学園に入学する場合、そういった専門系の学校卒業生や、製菓業界から企業の出資で入学するケースが多い。料理とはまったく何の関係もない、昇進証明普通の大学から編入してくる結城のような生徒は稀だろう。

「それに、同じ部屋になるなら出来れば年齢が近いほうがやりや

すいじゃない？となると、現時点では貴方以外に該当者がいないのよね」

赤の他人同士で共同生活を送る難易度もさることながら、それにジエネレーションギャップが加わるとなると、お寒い事態になる事だけは容易に想像が出来る。

選択の余地はなさそうだった。諦めて歎息する。

「助かるわ、ありがとう。大丈夫よ！空き部屋が出しだい、必ず貴方に連絡するから！約束するわ」

手渡されたルームキーを受け取り、手の中できりと回してからポケットにねじ込む。

その笑顔に、胸中でそこはかかない敗北感を味わいながら、結城は受付をあとにした。

甘5（後書き）

このあたりのくだりはほぼ実話です。（マジで）

幸い、寮までの距離はそんなに離れていなかった。

入り口のカウンターにいた年配の女性寮母に挨拶と済まし、ついでに入寮の手続きをする。後日、銀行振り込みだと聞いていた寮費を、敷金という名目で、いきなり現金で請求された事には若干慄いたが、手持ちの余分でなんとかあった。個室から相部屋に変更されていたので、多少は値段が下がったとはいえ、予想外の出費である。早めにキャッシュコーナーを見つけておかないと、手持ちの現金が早々に切れる。

周囲に知己が一人もいない、右も左も分からないような不慣れな土地で、手持ちの資金が尽きるほど薄ら寒い事はない。

そうして結城がそういった諸々の手続きをすませ、ようやく部屋に向かおうとしたところで、またまた予想外のアクシデントに遭遇した。

「……マジか？」

寮にはエレベーターがついてなかった。

健康のためにも環境のためにも、確かにそれはいいことなのだろうが、そして結城もまだ成人も迎えていない若者であるからして、無論の事、普段であればエスカレーターよりも階段を使う生活を心掛けてはいるのだが。

「さすがに四十キロのスーツケース抱えて五階分を登るのはしんどいよな……」

人一人抱えて登るのと同じようなものだ。オマケに、スーツケースは構造上、引っ張っての移動を前提とされて作られているので、抱えて歩くとなると非常に持ち難い。

ましてやそれを一人でやるとなると。

「ちつくしょー……聞いてねえし」

聞いてない事ばかりだ。

とんだサプライズに驚きと喜びより、戸惑いと怒りを抱くが、目の前の現実是不変ならない。せめてここで唐突に脈絡なくドラエモンが出てきてくれれば助かるのだが、そんな奇跡は起こらない。

「まあ、登りますけどね……」

たつぷりと諦観のこもった呟きを漏らしりつただけの財産を詰め込んだトランクは重い。まるで人生のように重い。いや、僕の人生はきつとここまで重くないけど。

「住所も決まったことだし、実家から早めに荷物も送って貰わなきゃな……」

部屋わりなどは実際に学園に来るまでわからなかったので、当座の着替えやらなにやら、生活用品の全てをトランクにぶち込んでいている。どこかの歌のように、正に鞆一つで旅に出たのだ。

階段の踊り場ごとに休憩を入れつつ登る。一段一段ゆっくりあがると逆に疲れそうなので、階段は一気にあがった。

ようやく五階についた頃には、空調管理されている室内にも関わらず、全身が汗だくだった。にしても、汗かいてばっかだな今日。

「えと、503、503……」

ルームキーについているナンバープレートに部屋番号が書かれていた。踊り場に張られている案内図で、自分の部屋の位置を確かめながら、頭の中では、さて、ルームメイトにどう挨拶をしよう、などと考えていた。

（ま、やっぱ最初は無難にハジメマシテからだよな。てか、僕の語学が果たしてどこまで通じるかってのが問題なんだけど）

相手側といえ、まさか海外に出てきて相部屋を希望するぐらいだ。語学に不自由という事もないだろう。

まあ、いいや。

案ずるより生むが易し。ごちゃごちゃ考えるより、行動してみたほうが早い。

503号。

ドアに張られた金色の数字を確認し、一度軽く深呼吸。覚悟を決

めてノックをし、

「どーも、コンニチ——は？」

扉を開け、窓を背に立つ室内の先客の姿を目にした瞬間、思わずぎよっとして硬直する。

（あ——）

黒い目。黒い髪。まるで生まれてから一度も染めた事のないような、まるで痛みのない艶やかな髪だった。肌は滑らかで、東洋人にしては色素が薄い。

明らかにアジアの顔立ちなのに、日本人ではないと一目で分かる。同じ東洋系の顔立ちでも、やはり国によってはこんなにも違いがあるのだと——この時初めて知った。恐らく、欧米人には見分けのつかない差異。日本人に、オランダ人とイギリス人の見分けがつかないように。一見すると目立つ感じはないが、よく見ると整った綺麗な顔立ちをしていた。儚げな美人、という表現がぴったりである。

そこまでは問題ない。

それだけなら問題はなかった。

相手が、泣いてさえないなければ。

こちらを見つめる彼女の、真っ黒い綺麗な瞳から零れ落ちる涙に、頭が真っ白になる。

（え、ちょ、ま、——）

こちらの突然の登場に驚いたらしく、さっと顔を背ける。いきなり泣き顔を相手も気まずいだろうが、初対面で泣きっ面を拝まされるこちらも十二分に気まずい。夏の暑さのせいではなく、だからだと汗が流れる。どうにかこの空気をキャンセルする方法はないものかと、脳内で高速シミュレートしてみるが、妙案は浮かばなかった。（ええと、とりあえず取れそうな手段は、誤魔化す、とぼける、見なかった事にする、何事もなかったかのようにこの場を立ち去る……）

異次元に召還される、時を戻せないか邪神様をお願いしてみる、などと、益体の無いアイデアが浮かんでは消える中——

結局何も思いつかず、その間も泣き続ける彼女に、結城はそつと近づくと、予め頭の中で考えていた挨拶や自己紹介を全て放棄して、相手の頭にぼんつと軽く手を乗せながら、ただ一言、

「泣くなよ」

そう言った。

それが、この学園で出会う、最初の生徒との第一次接触。ファーストコンタクト

そして。

今後、彼女達が送る学園生活の始まりだった。

甘6（後書き）

と、いうわけでビジュアルの一切出てこない主人公、ユウキは女です。

口調はキャラではなくガチの素です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621z/>

甘味学園学生寮

2011年12月7日08時53分発行